

中国軍は、朝鮮半島有事に備え部隊改編を開始

阿部信行

(コメント)

中国人民解放軍の瀋陽軍区（旧満州地区）は、北朝鮮、ロシア国境に接しており、従来の主たる作戦対象はロシアでした。しかし近年は、主たる作戦対象が朝鮮半島有事対処に変わりつつあるようです。そのように判断される理由は、瀋陽軍区の演習内容及び部隊の改編にあります。我々は中国軍の朝鮮半島南下作戦には注目せざるを得ません。

興味のある方は、下記資料（出典：漢和防務評論 20130725）をお読みください。

1. 瀋陽軍区の演習報道

2013 年 3 月、韓国の「世界日報(3 月 8 日号)」は、中国軍が、年初から長白山一帯で冬季訓練を行ったと報じた。このニュースは、米国媒体に配信され、人民解放軍が中朝国境に集結したと報じられた。当然中国国防部は否定した。

2012 年 12 月 7 日、中国中央テレビは、某装甲旅団が冬季訓練を行ったと報道した。99G 型戦車の映像が出たことから、第 39 集団軍装甲旅団が参加したことが分かった。2013 年 1 月 26 日、“中国の声”放送は瀋陽軍区の冬季訓練の様子を放送した。続いて 2 月 25 日、官側の媒体は、瀋陽軍区某機械化歩兵連隊の冬季訓練を報道した。また「人民画報」3 月号も冬季訓練の写真を掲載した。韓国媒体は上述のニュースをコメントし、その後香港、中国の媒体に転載され、100 mm6×6 輪突撃砲、86 型履带式歩兵戦車（30mm 鏈砲に換装）、96A 型戦車の写真が掲載された。一部の写真は、第 39 集団軍第 190 機械化歩兵旅団の過去の写真であった。

2. 演習報道から見える瀋陽軍区の任務変更

漢和防務評論は、前項の訓練は年度の定例的訓練であり、中朝国境に移動してはいなかったとし、次の 2 点を指摘した。

(1) 近年来、瀋陽軍区は跨区機動訓練（軍区を跨る機動訓練）を行ってきた。また 2006 年以降、機関紙解放軍報が瀋陽軍区某集団軍の“長距離機動”を報道していること等から、同軍区の主たる作戦任務はソ連、ロシアへの対応から朝鮮半島有事対応に変更されたと判断する。

(2) 演習は、毎回北朝鮮内部の政変、崩壊、韓国と開戦、及び情勢の混乱によって大規模難民が中国に侵入したと想定して行われ、第 39 集団軍は北朝鮮国境から遠くない地点まで進出し、積極防御を行なっている。このニュース報道は 2013 年 1 月以降、中国軍及び中国政府によって広く流布されており、その目的は明

らかだ。

3. 瀋陽軍区の編制改革

近年来、瀋陽軍区は、機械化歩兵旅団の建設を促進している。従来の装甲師団を改編、スリム化、減量化し快速反応能力を高めている。特に第 39 集団軍の近年来の編制改革を見ると、朝鮮半島有事の場合の対応策が分かる。この集団軍は、瀋陽軍区では最強の集団軍であり朝鮮半島を熟知している。

(1) 第 190 機械化歩兵旅団

現在第 39 集団軍の隷下に第 190 機械化歩兵旅団がある。この旅団は、軽機械化部隊の見本のような部隊であり、快速反応能力が高い。したがって朝鮮半島有事の場合、本溪に駐屯する第 190 機械化旅団がまず最初に行動を起こすはずである。主要な部隊装備は、6×6 輪各種突撃砲等、輪式作戦装備であり、現在は 8×8 輪突撃砲に逐次換装されつつあるようだ。第 190 機械化歩兵旅団は、中国陸軍の中で 5 本の指に入る精鋭旅団である。

(2) その他の新設機械化歩兵旅団

a. 第 67 機械化歩兵旅団？

第 16 集団軍は、1 個機械化歩兵旅団（第 67 旅団）を建設したようだ。同集団軍は、冷戦時代中ソ国境に最も近い集団軍であった。現在はその性格を転換しつつある。中国軍の機械化歩兵旅団の基本的な建設方式は、元々ある装甲師団を分解し、その他の機械化歩兵部隊と混成して機械化歩兵旅団に改編する。中国陸軍の機械化歩兵旅団は、通常 2 個機械化歩兵中隊（装甲歩兵中隊）及び 1 個戦車中隊で編成される。

b. 第 202 機械化歩兵旅団？

解放軍報の演習関連報道を見ると、元々第 39 集団軍に隷属していた第 3 装甲師団は、現在某装甲旅団とのみ報道されている。これは第 3 装甲師団が改編されたことを意味すると思われる。ある情報によると、同師団は第 3 装甲旅団に改編され、残りの戦力は第 202 機械化歩兵旅団に改編されたとある。しかしこれは未確認である。中国の機械化歩兵旅団は、組織上、軽機械化歩兵旅団と重機械化歩兵旅団に分けられる。第 202 機械化歩兵旅団は重機械化旅団ではあるが、作戦部隊としては中型である。したがって機動力は第 3 装甲旅団よりも高いと思われる。

第 3 装甲師団の旅団への改編に驚いていた人々がいる。なぜならば、この師団は中国陸軍最精鋭の 2 個師団のうちの一つだからである。他の一つは当然第 38 集団軍の第 6 装甲師団である。しかしこの改編は、当然予想されたことである。

ロシアの装甲師団も、快速反応が容易な旅団に逐次改編され、スリム化、減量化が図られている。この点で中露陸軍の改編の基本路線は同じである。

4. 装甲旅団の火力

實際上、**MBT**（主戦タンク）の戦闘力は大きく向上し、デジタル化され、精確打撃力が大幅に向上している。現在の 1 個装甲旅団（99 型戦車配備）の火力は、54 型や 69 型の戦車を主体としていた当時の 1 個装甲師団の火力に比べ弱くなるどころか大きく向上している。

5. 瀋陽軍区の作戦

瀋陽軍区の近年の冬季・夏季演習のニュースを見ると、数年前から司令部指揮所演習では朝鮮半島全体の地図を使用している。このことから、最初に軽機械化歩兵旅団が中朝国境地区に進出した後、重機械化歩兵旅団が後に続くと思われる。この二つの部隊は、陸軍航空旅団の航空火力支援を受けるものと思われる。もし戦争の規模が更に拡大した場合には、米韓連合軍の北上を招く可能性があり、それに対抗するため第 3 装甲旅団に類似した重型部隊が第 3 梯隊として派遣される可能性がある。続いて第 116 機械化歩兵師団の出番が回ってくる。それぞれの部隊は、規模が不斉一、武器も不斉一、機動速度も不斉一であり、これらの点が最大の弱点ではある。

（出典：漢和防務評論 20130725）

以上